

しろねこ と くろねこ

げんさく みやざき さとこ
え と ぶん やまもと かよ

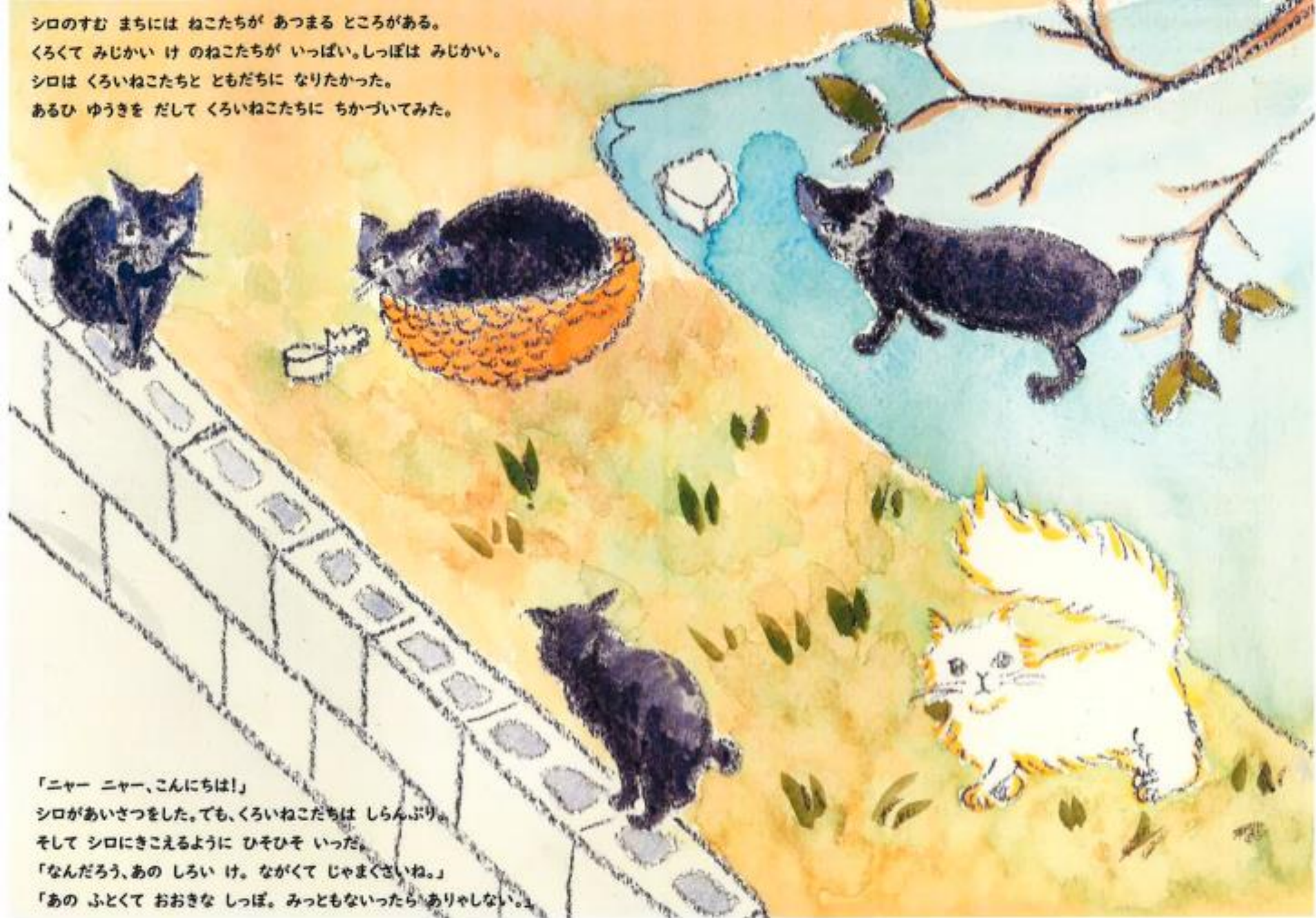


うまれたときからひとりぼっちでいきている。
しろくてながいけ、おおきくてふさふさなしっぽはからだをぐるっと
ひとまわりできるほど。



シロはおおきなしっぽにつつまれてねむるのがだいすきだった。
ふさふさのしっぽにつつまれてねむるときはさみしくなかった。

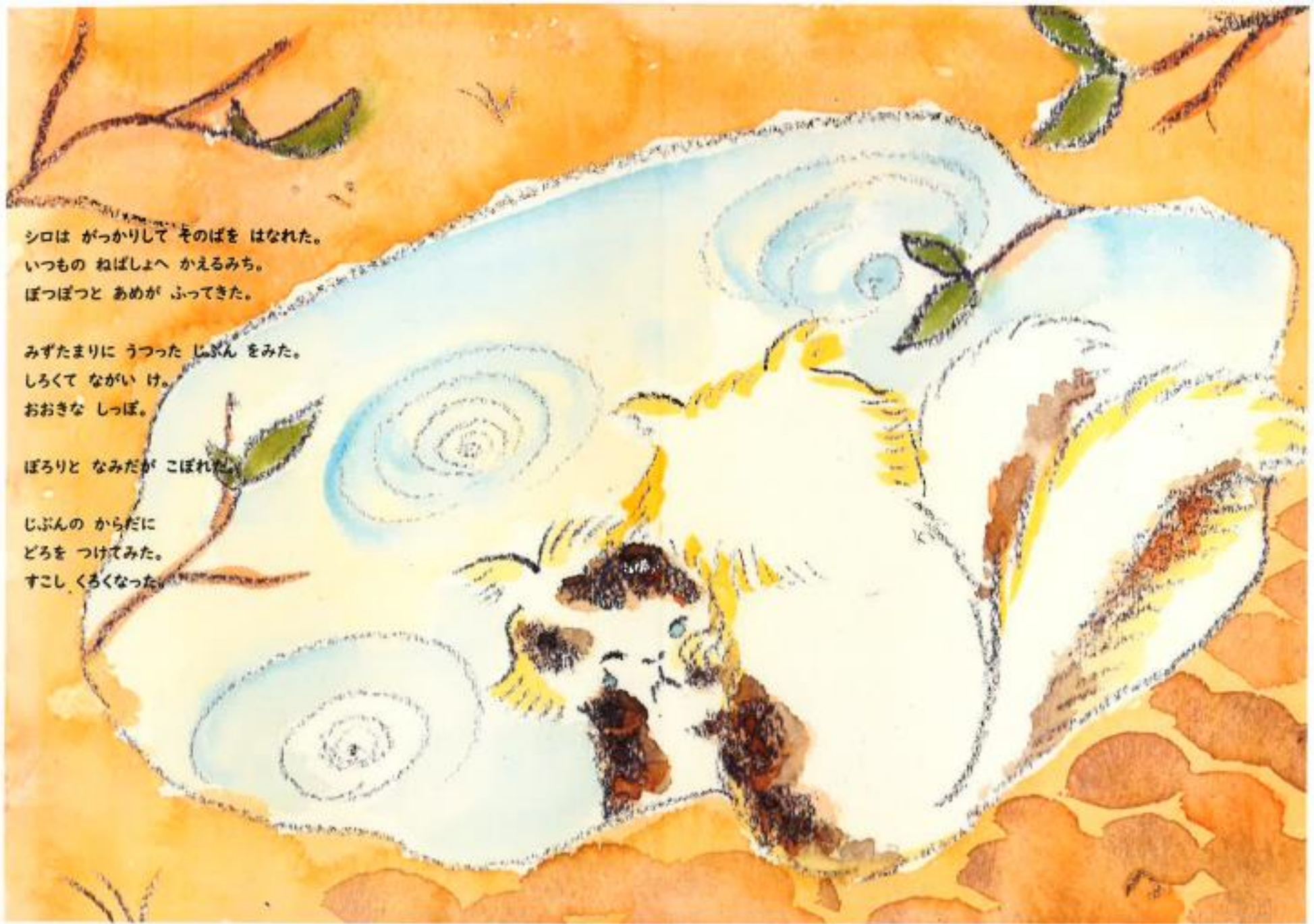
シロのすむ まちには ねこたちが あつまる ところがある。
くろくて みじかい け のねこたちが いっぱい。しっぽは みじかい。
シロは くろいねこたちと ともだちに なりたかった。
あるひ ゆうきを だして くろいねこたちに ちかづいてみた。



「ニャー ニャー、こんにちは!」
シロがあいさつをした。でも、くろいねこたちは しらんぷり。
そして シロにきこえるように ひそひそ いった。
「なんだろう、あの しろい け。ながくて じゃまくさいね。」
「あの ふとくて おおきな しっぽ。みっともないったらありやしない。」



くろいねこたちは そういって わらうと
シロの ことなんか いないみたい
はしりさって いった。
シロがしょんぼりしていると、
いちばん ちいさな くろいねこがふりかえって
シロをちらっと みた。



シロは がっかりして そのばを はなれた。
いつもの ねばしょへ かえるみち。
ぼつぼつと あめが ふってきた。

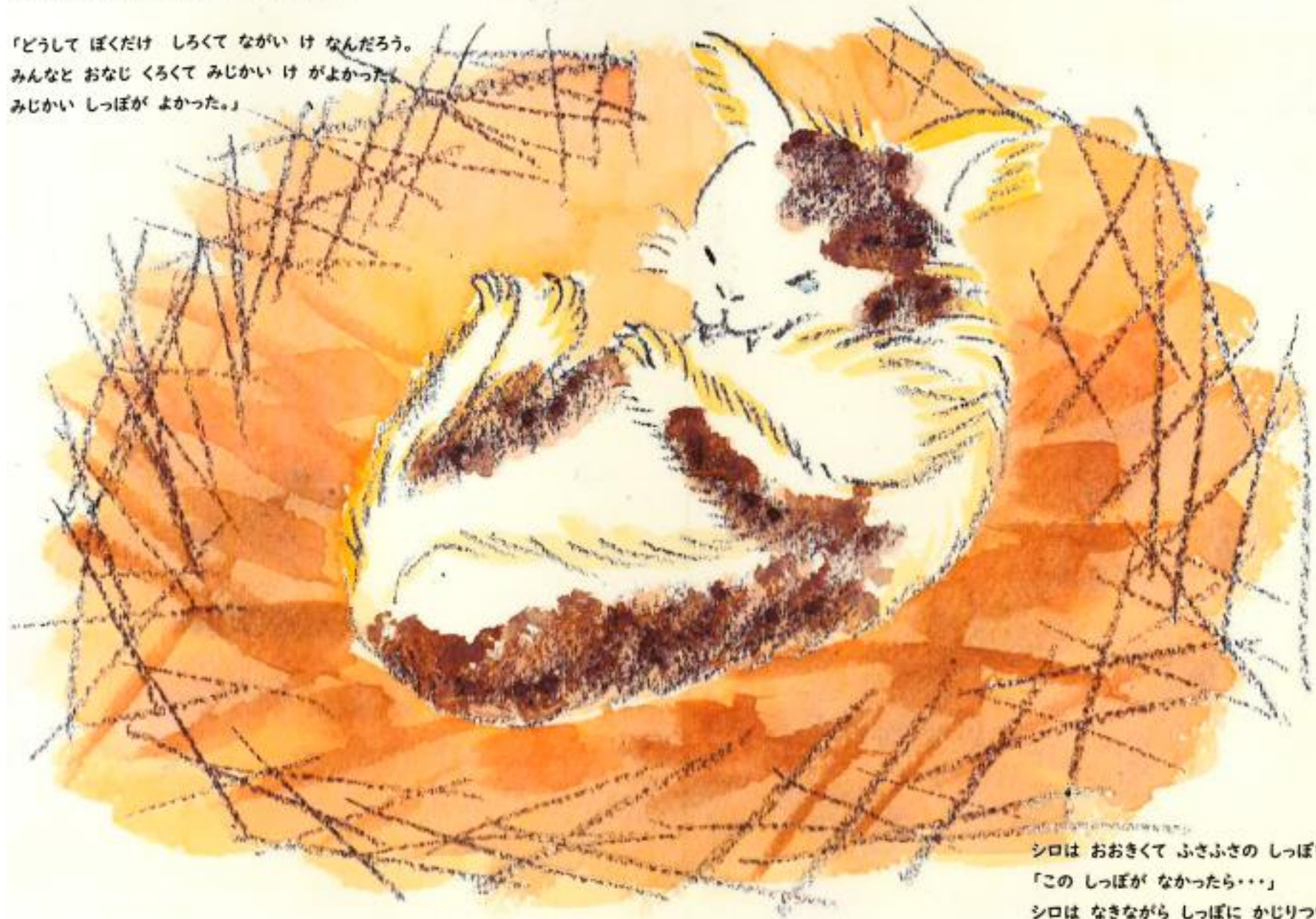
みずたまりに うつった じぶん をみた。
しろくて ながい け。
おおきな しっぽ。

ぼろりと なみだが こぼれた。

じぶんの からだに
どろをつけてみた。
すこしくろくなった。

ねばしょへ かえってから、シロは かんがえた。

「どうして ぼくだけ しろくて ながい け なんだろう。
みんなと おなじ しろくて みじかい け がよかった。
みじかい しっぽが よかった。」



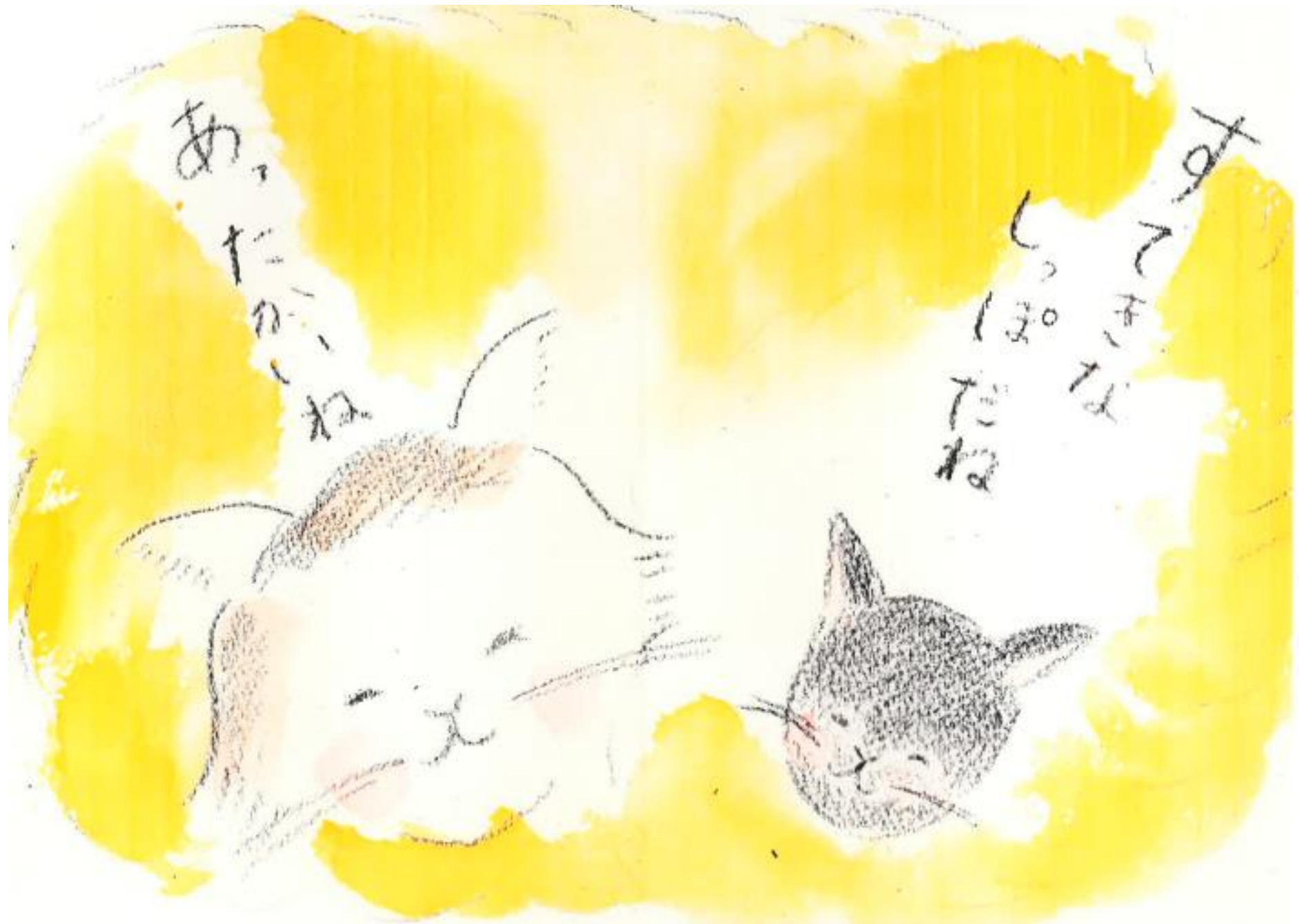
シロは おおきくて ふさふさの しっぽをみた。
「この しっぽが なかったら……」
シロは なきながら しっぽに かじりついた。



そのとき、ガタンとおどかして
ンロが、ふせむくと
ひるますれちがった。ちいさな
くろいねこが たっていた。
そとは あめが つよくなってきたのが
ちいさな くろいねこは ずぶぬれになっ
て、おぼろと ぶらぶらから 窓ロを 覗きみしていた。

シロは おそろおそろ ちいさな しろいねこに ちかづいた。
そして ちいさな しろいねこを じぶんの しっぽで そっと くるんでやった。
ちいさな しろいねこは
シロの ふさふさなしっぽに ぐるまれて
めをつむった。
そして
しばらくして
つぶやいた。





あ、
たか、
い、
ね

し、
ほ、
ただね

あ、
さ、
な

くろねことしろねこ

げんざく みやまのねこ
えとぶん やまもと かみ





うまれたときからずっと
まっくらな かおに
ぴかぴか ひかる めのねこたちと いくている。
くろくて みじかいけ。
みじかい しっぽ。
このまちの すみっこで
なんとなく まいにちが すぎていく。

ぼくはもうおとなとよばれていいしなんだけど
からだはこねこのときのまま。
いっしょにうまれたみんなよりだいぶちいさい。



えさにありつこうとしてもはやくはしれない。
とおりがりにだれかにあたまをたたかれたことがある。
わざとぶつかられてころんだこともある。



このあいだしろいねこをみかけた。
ふざふざのけとふとすまるしつぽ。
なんてみっともないだろう。



このよのなかにじぶんよりみっともないと
おもえるいきものがいること「
しょうじきほつでした。」

あいつ、どこへなになっているんだろう。

そっとあとをつけてみた。

ただきょうみがあっただけ。



あいつのねばしよきつきとめたとき

ぼくのからだはあめにあたってひえきつていた。



あいつはだまって
ほくのすぶぬれのからだを
おおきなしっぽでくるんでくれた。



だれかのことをほめたことも
だれかにほめられたこともないのに
おもわずつぶやいた。



あ、
たかね

しほ、
たかね
たかね